

- ご入場は、各回 20 分前からを予定しております。
- 各回 200 名まで、入れ替え制とさせていただきます。
- ご入場の際は感染対策にご協力をお願いいたします。

■10月7日 (土)

プログラム①	10:00～ あいさつ：実行委員会代表 10:05～12:40 『はだしのゲン (第一部)』 劇映画 / 107 分 ●トーク：児玉 三智子 (被団協事務局次長)
プログラム②	14:00～ 有原 誠治監督あいさつ 14:05～15:30 『声をあげる高校生たち』ドキュメンタリー / 43 分 ●トーク：斉藤 とも子 (俳優) / 学生たち
プログラム③	16:00～18:30 『ヒロシマの証人』 劇映画 / 110 分 ●トーク：山口 逸郎 (映画プロデューサー)
プログラム④	19:05～20:40 『サイレント・フォールアウト』ドキュメンタリー / 96 分

■10月8日 (日)

プログラム⑤	10:00～12:30 『渡されたバトン～さよなら原発～』 劇映画 / 120 分 ●トーク：丹治 杉江 (元原発事故損害賠償群馬訴訟原告代表 / ヒロシマ ナガサキ ビキニ フクシマ伝言館事務局長)
プログラム⑥	13:30～15:40 『長崎の郵便配達』ドキュメンタリー / 97 分 ●トーク：川瀬 美香 (映画監督)
プログラム⑦ 【無料】	武蔵大学社会学部メディア社会学科永田ゼミ研究発表 16:00～18:30 「いま花岡事件を考える～映像・朗読による発表～」 ～武蔵大学社会学部メディア社会学科永田ゼミ学生たち 司会：永田浩三 (武蔵大学社会学部教授) ※このプログラムのみ、入れ替え制ではありません。無料でご参加いただけます。

★終了時間はプログラムの進行上、若干延長する場合がございます。

***鑑賞券** 鑑賞券は各プログラムごとに必要となります。
大人 《前売り》1,200 円 《当日》1,500 円
学生・子ども 《前売り》 500 円 《当日》1,000 円

*鑑賞券のお申し込み・お問い合わせ

電話 03-6434-9346 [共同映画 ※平日 9:30～17:30]

090-9855-1135 [アリハラ ※13:00～17:00]

FAX 03-6434-7040 [共同映画]

Mail eigasai@gmail.com

被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会

ブログ <http://hikakueiga.exblog.jp/>

Facebook <https://www.facebook.com/hibakueiga/>

instagram <https://www.instagram.com/hibakueiga/>

振込先：みずほ銀行 練馬富士見台支店

(普通) 1232039 口座名 被爆者の声をうけつぐ映画祭



- 西武池袋線 江古田駅南口徒歩 6 分
- 都営地下鉄大江戸線 新江古田駅 A2 出口徒歩 7 分
- 西武有楽町線 新桜台駅 2 番出口徒歩 6 分

第17回 被爆者の 声をうけつぐ 映画祭 2023



映画は、ヒロシマ・ナガサキをどのように伝えて来たのだろうか？

10月7日(土)・8日(日)
武蔵大学江古田キャンパス
■ 8号館 8階 武蔵大学 50周年記念ホール

主催：被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会 / 武蔵大学社会学部メディア社会学科永田浩三ゼミ
後援：日本原水爆被害者団体協議会 / ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 / 練馬・文化の会

被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会 TEL:03-6434-9346 FAX:03-6434-7040

〒107-0062 東京都港区南青山 4-18-21 南青山スカイハイツ 504 共同映画(株)内

第7回 被爆者の 声を つづけて 映画祭 2023

本映画祭は、2006年に日本被団協が50周年を迎えたことをきっかけに企画され、2007年に第一回が開催されました。映像や映画での被爆体験の継承を目的にしています。

『声をあげる高校生たち』



ドキュメンタリー/カラー/2023年/43分/
脚本・監督:有原誠治/ナレーター:齊藤とも子
製作:高校生平和ゼミナール全国連絡センター

学校の垣根を越えて自主的に集い、学び行動する高校生平和ゼミナールの若者たちの記録。核兵器禁止条約が発効した2021年、日本が条約に参加することを求めて、高校生たちが学校や街頭に立って署名活動を始めた。コロナ感染下、戸惑い、悩み、励まし合って集めた署名を外務省に届けて、高校生たちは次々と発言。高校生たちのひたむきなまなざしと行動が、核兵器と戦争のない世界への希望を紡ぐ。

『サイレント・フォールアウト』



ドキュメンタリー/カラー/2023年/96分
プロデューサー・脚本・監督:伊東英朗
ナレーター:加藤登紀子

『放射線を浴びたX年後』シリーズ、第三弾。前2作では、アメリカによる太平洋核実験で被曝したマグロ漁師たちの被害の実態を追った。今回は、1950年代から60年代にかけてネバダ州で行われた核実験の被害の実態を丹念なアメリカ取材で浮かび上がらせる。米国内の被曝者、研究者らへのインタビューと文書をもとに、子どもたちを被曝から守るために女性たちが始めた「乳歯調査」の経緯を中心に、知られざるアメリカ国内の放射能汚染を明らかにする。

『長崎の郵便配達』



ドキュメンタリー/カラー/2022年/97分
監督:川瀬美香
製作:長崎の郵便配達製作パートナーズ

元英空軍大佐でジャーナリストのピーター・タウンゼンドが来日して、長崎を訪れた際に出会った谷口穰暉取材し、1984年にノンフィクション小説『THE POSTMAN OF NAGASAKI』(ナガサキの郵便配達)を出版した。その小説を頼りに、タウンゼンドの娘で女優のイザベル・タウンゼンドが長崎を巡り、父と谷口の交流と想いを紐解くドキュメンタリー。

『はだしのゲン(第一部)』



劇映画/カラー/1976年/107分
原作:中沢啓治/脚本・監督:山田典吾
製作:現代ぶろだくしょん

原作は、1973年から少年雑誌に連載された中沢啓治の漫画『はだしのゲン』。作者の被爆体験にもとづいた作品で、今も広く読み続けられている。ピカドン(原爆)で父と姉と弟を失った少年ゲンが、母と生まれたばかりの妹を支えて生きる。苦境や哀しみを越えて明るく生きようとする少年のたくましさ、原爆への怒りがほとぼしる。ゲン役を佐藤健太、父母役の三國連太郎、左幸子の名優が熱演。

『ヒロシマの証人』



劇映画/モノクロ/1968年/110分/監督:斎村和彦
製作:『ヒロシマの証人』製作委員会

被爆から23年、広島では原爆症で亡くなる人々が後を絶たない。被爆者たちが肩を寄せ合って暮らす相生地区は、団地の建設計画で立ち退きの対象となる。原爆症と生活苦に苛まれる被爆者たちは、米軍原爆傷害調査団・ABCCの非人道性を批判する医師たちとともに立ち上がる。被爆者をモルモット扱いする米国と、放射線の影響を軽視する日本政府を告発し、原爆のもたらす非人間性を浮き彫りにする。出演は望月優子、山本學 他。

『渡されたバトン～さよなら原発～』



劇映画/カラー/2013年/120分/監督:池田博穂
脚本/ジェームス三木
企画・製作/『日本の青空III』製作委員会・有限会社インディーズ

1969年、新潟県巻町の角海浜にレジャーランド開発の報が舞い込み、住民たちは期待を膨らませる。ところが、北東電力が巻町に原発建設計画していると「新潟日報」がスクープ。補助金で寂れた町が息を吹き返すと、議員や町職員は大喜び。しかし、多くの町民は戸惑っていた。原発そのものをよく理解していなかった。そんななかで、住民の意見を反映させる全国初の住民投票が自主管理の元で実施されるのだった。出演は、赤塚 真人、渡辺 梓 他。

武蔵大学社会学部メディア社会学科 永田ゼミ研究発表

「いま花岡事件を考える ～映像・朗読による発表～」

永田ゼミ19人はこの春から、1945年に秋田県大館市で起きた花岡事件について、6月・8月の現地学習を含め、深く学んできました。中国人強制連行はなぜ起きたのか、蜂起はどんなものだったか。闇に消された歴史を暴き責任を問う動きはどのように進められたのか。78年前の事件に光を当て、わたしたちはいま何をなすべきかを、表現を駆使して考えます。

広島、長崎でも、強制連行で働かされていた多くの方々が被爆しました。強制連行、強制労働とはどのようなものであったか、学生たちが掘り下げて報告します。

武蔵大学社会学部メディア社会学科
永田ゼミの学生たち
司会:永田 浩三(武蔵大学社会学部教授)

[スチール提供・上映協力] 北星株式会社/
高校生平和ゼミナール全国連絡センター
株式会社伊東英朗事務所/ART TRUE FIRM
プログラムデザイン・貼絵イラスト/吉水法子